
悪魔の創造った物語

ダイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の創造った物語

【Nコード】

N4841J

【作者名】

ダイチ

【あらすじ】

楽でも苦でもない生活を送ってきたライト村の人たち。そこへ、闇が落ちる。

記憶を失くした少年、何を考えてるか分からない少年、何も知らない少女が出会うとき、終わりの物語が動き始める。

序章：終わり（前書き）

たまに、行き過ぎた残酷な描写がある可能性がありますので、そのような表現が苦手な方は読まないことをお勧めします。

序章：終わり

何も感じなかった。

少年の目の前に、赤い液体の飛び散った“物体”があっても、何も感じなかった。そしてそれらを踏み、潰し、歩いていても、何も感じなかった。何も、何も感じない。

一歩踏み出す。不気味な音を上げ、それが潰れ、飛び散る。また一歩。また一歩、また一歩、また一歩。だんだん楽しくなってきた。まう。何でこの“物体”はこんないい音が鳴るんだろう…。

また一歩、また一歩。また・・・一歩。

笑いが込み上げて来る。何でだろう、何でだろう何でだろう。

「・・・ふふっ・・・」

笑いが漏れてしまう。何で、何で何で。一歩、また一歩進む。少年はひとつの“物体”を見て形相を変え、その“物体”を思いつきりふみ潰す。少年は上を向き、悲しそうな顔で笑い出す。

「何で、この“物体”^{にんげん}たちは、こんなに脆いんだろう」

少年は笑う。高く、高く天に届くまで笑う。少年が思いつきり踏み潰した“物体”は少年と同じ、ベージュの髪色、華奢な手足、白い肌…。少年は笑う。“物体”の、こっけいな姿を。“物体”が転がり、赤く塗り潰された光景を。終わりを知っても、何も出来ない自分を。

少年にとって、これが終わりであり、始まりであった。

序章：終わり（後書き）

こんな感じで良いのかが分からない。

意味が分からない表現があったらごめんなさい；

なんかどこにでもありそうな始まり方…。

第一話 絶望の淵で

「お前、誰？」

声がした。誰もいない、真っ赤な絶望の中で。少年は顔を上げる。そこには、短髪の髪をした少年がたっていた。髪はベージュ色。少年と同じ、ベージュ色。

やった……。生き残りがいたんだ……。

少年は思った。そう、生き残り。少年達の周りには、生きているものなんて、いなかった。すべて、血の海におぼれ、すでにいない。少年はこの絶望の淵で希望を抱いた。

「僕は……」

少年は答えようとし、口を開けたが、言葉が止まってしまふ。

僕は……？

分からない。自分が誰なのか分からない。あれ、何でここにいるんだっけ？分からない。分からない分からない分からない。僕は誰で、何故ここにいて、周りの惨状は何なのか、分からない。短髪の少年は少し考えたそぶりを見せ、聞いてくる。

「分からないのか？自分が」

少年は戸惑いながらうなずく。短髪の少年は自分に手を当てて言う。

「俺はフラッド。フラッド・ヴァイオ。生き残り同士、仲良くなるうかと思っただけど、自分がわかんないんか・・・」

少年はうなずく。

あれ？

何で僕、さっき、自分が生き残りだって分かったんだろう。分からない。もしかしたら、さっきの状態だったら全て覚えていたのかも知れないのに・・・。思い出せない、何でだ？何なんだ？分からない。

「まあいいや。お前、自分が分かんないんだろう？俺と友達になって、自分探しの旅、なんてどうだ？」

フラッドが聞いてくる。少年はフラッドを見つめる。

それもいいかも知れない。

少年はうなずいた。フラッドは笑い、うなずく。そして、右手を腰に、左手をあごに添え、顔を近づけてくる。

「お前、名前がないと、不便だよな…。俺がつけてやるっか？」

少年は少し考える。確かに、不便だ。少年はうなずいた。

「よし、お前はクリアだ。何も分かんないから、クリア。クリア・ヴァイオにしようぜ」

クリア・・・ヴァイオ。気に入った。クリア・ヴァイオ。響きがいい。

「俺たちは今日から兄弟みたいなの？」

フラッドが笑って言うてくる。クリアも笑い返した。しかしそのあと、クリアは驚いた。フラッドが、悲しそうだった。すぐに普通に笑う。

何で、悲しそうだったんだろう…。

何を考えてるか分からない少年・フラッド。記憶を失くした少年・クリア。二人が出会った時。

第二話 泥棒

「これと、これ、あとこいつの持っているのもください」

にぎやかな町に行き着いた少年二人、フラッド・ヴァイオとクリア・ヴァイオ。赤で汚れた洋服を着替えるために洋服屋に寄った。周りはその二人を見て、ざわつく。もちろん店の店員もだ。赤・まあ言ってしまうば『血』で汚れている少年達なのだから、みんな心配したり、怪しがったりもするもんだ。

「……1580Jシエオです……」

店の店員が驚きながら言う。ついでに言うと、「は円とほぼ同じ額だ。フラッドとクリアは小汚い袋の中をあさり始める。

「1580Jもあつたっけ？」

クリアが心配そうにフラッドに聞く。フラッドは自信満々そうに答える。

「あるだろ！てかなきゃおかしいよな。あんだけ取って来たんだから」

“取って来たんだから”……。店の店員、周りにいた人々全員が二人を信じられないと言う顔で見る。フラッドとクリアは何がなんだか分からない様子で。

「……何？」

フラッドがつぶやく。店の店員が二人の少年に顔を近づけ問いだす。

「・・・取った？」

二人はうなずき、同時に

「取った」「

と言う。店員は一度考えるように目をつぶり、そして目を開け、もう一度聞く。

「・・・取った？」

フラッドとクリアは互いに目を合わせ、不思議そうにもう一度。

「・・・取った」「

店の店員は少年二人を捕まえた。二人は抵抗しまくったが、大人にはかなわない。

「な、何すんだよ！くそが！！」

フラッドが叫ぶ。店員は力いっぱい近くにあって縄で二人を縛り上げる。

「い、いたたた！痛っ！え？な、なにになににさー！」

「この泥棒ガキどもが！おとなしく警察に連れて行かれなさい！」

「な、何で警察なんか！俺たちが何したんだってんだよ！」

「泥棒だろ！さっき自分たちで認めただろが！」

「ど、泥棒って！？泥棒って何さー！！」

店員はその言葉に反応する。赤い“もの”。店員はクリアに近づき、問う。

「赤い……“もの”って……？」

クリアは泣きながら答えた。

「フラッドは“死体”って言ってたよ」

死……体。確かにそう言った。この少年は“死体”と。

「死体って、何で……」

店員が聞いてきた。クリアが答えようと口を開ける。

「クリア……！」

フラッドが叫ぶ。クリアは驚き、言葉を発さなくなる。店員はフラッドをにらみつける。フラッドも、店員をにらみつける。

「クリア、これは俺たちの問題だ。知らねー奴なんか教える必要はないんだ。分かったか」

クリアはビクつき、黙ってうなずいた。店員はその一言で聞くのをやめた。確かに、こいつらの事だ。深入りする必要はない。……だが。

「だが、取った、と言つのは理由が聞きたいな。もしかしたら泥棒かも知れないからな」

フラッドは舌打ちをする。店員は勝ったと思い、二人に耳を傾ける。「俺たちはただ、死体から金を取っただけだ。ただ、それだけの話しだろ?」

フラッドは言う。クリアは黙っていることにする。何も知らないため、話しに入ることが出来ないからだ。

「でも取ったってことは、泥棒だろう?」

「死体相手に泥棒もくそもあるかよ」

「……」

店員は黙り込んでしまう。死体は、どうなのだろうか。

「俺たちはあの時、生きるか、死ぬかの二択だったんだ。じじい、お前は俺たちに死ぬと言ってるのも同然なんだぜ?」

「じじいは余計だ」

店員が考える。こいつらは生きるか死ぬかの二択の状況に出会い、生き延びるために、死体から金を取ったと。で、死体は死体なんで泥棒とか関係ないと。金も、使い道がないより、少年たちに使われただほうがいいと言うのか(言ってない)……。

店員は考える。少年たちを見る。確かにこいつらは血で汚れた洋服を着ていて、とても汚い。こいつらの言っていることは正しいのか。だが嘘をついている可能性もある。店員は考える。そして、考えた末……。

「……あつれー、俺、今まで何してたっけなー。え、何でこの汚いのがここで縄に縛られてるんだよ。うわ、気分悪ー」

フラッドとクリアは声を合わせて一言言った。

「「・・・は？」」

店員はナイフを取り、少年たちを縛っていた縄を切る。少年たちは今まで止まっていた血が流れる様な感じを体験する。そしてすぐ、縛られてたところがびりびりするようになる。

「ちょ、店の邪魔だから早く買うもの買って出てってくんない？あ、1580」ね

よく分からないが、フラッドは金を出し、洋服を受け取った。

「着替えるんなら、奥を使っでいいぞー」

店員は少年たちを奥へもてなす。フラッドとクリアは導かれるまま、奥へと行き、着替え、店員のところへ行く。そして持っていた汚い服を店員が取って、

「これは俺のほうで処分してやるよ。じゃ」

フラッドとクリアは店を出る。店員は手まで振ってくれている。あ、あの店員は逃がしてくれたのだ。

二人は見合って、

「よく分かんないが、逃がしてくれてよかったな」

フラッドが笑いかける。クリアはつられて笑う。

「そうだね！じゃあ、次はどこに行くの？」

フラッドは考え、

「俺たち一族は村に住んでいたんだ。こういう大きな町ではなく、ちいさな、こじんまりとした村。でも、皆が笑って過ごしていた、村。だから、村へ行ってみようと思うんだけど」

フラッドはクリアに目で聞くように見る。クリアは少し考え、答えを出す。

「うん。行ってみよう！そこで僕の記憶が戻るかもしれない」

二人は地図を広げ、町を出て草原に。村へ向かった。

「ここにしようぜ！！」「ライト村」！！！」

二人は歩き出す。

第二話 泥棒（後書き）

長い、ですね。

早くライト村に着いてもらいたくで、頑張って書いたらこんな長文に…。

飽きないでくださいね。

第三話 迷子

「きついんだけどー・・・」

草原のど真ん中でクリアがつぶやく。その前を同じように、疲れている歩き方をしているフラッドは反応せず黙々と進んでいく。

「ねえーフラッドお・・・」

フラッドは無視して進む。クリアは無視されたのに少しムカツと来て、少し大きな声でフラッドに声をかける。

「フラッドー！」

またフラッドは無視。さすがにクリアは本格的にムカついてまた大きな声でフラッドを呼ぶ。

「フラッドー！ー！」

「うるさい！ー！」

やっと返事をしたフラッド。しかしムカついた顔をしていた。クリアはフラッドの顔を見て少し怖気づく。フラッドはまた前を向き、歩き始める。そして小さな声で言う。

「俺だって疲れてんだから・・・」

と言った。クリアは自己中な考えだったな、と思って反省する。フラッドだって、こんな広い草原の中で疲れないわけないんだ。

「まさか、こんな広いとか思ってたよ。ミスったよな」
「うん」

「おいクリア。あとのくらいか地図で見えてくれ」

クリアは自分のポケットに入っているぼろぼろの紙を広げる。そこには広い大地が書かれている。クリアは地図とにらめっこをして一言言った。

「僕、地図の見方、分かんないよ」

フラッドはため息をついた。クリアは記憶をなくして何もかもを忘れてるんだ。

「地図貸して」

フラッドはクリアに手を伸ばし、地図を受け取る。フラッドは地図に人さし指を置き、現在地を示す。

「今は大体この辺だ。で、このコンパスから見ると・・・」

フラッドは自分のポケットからコンパスを出す。

「ちゃんと南へ向かってるから、そろそろ着くはずなんだけど」

と言ってフラッドは辺りを見回す。だが、周りには村とか無く、ただただ草原が続いていて・・・。クリアとフラッドは顔を見合わせて。

「無いよな・・・」

「・・・うん」

迷子決定になった。こんな何も無い草原で迷子になるって大変だろ
おい。二人はうめく。

「何も無いってやばいよな？いや、ヤバイだろ。すぐに村に着くと
思って水しか持って来てないし、すぐ死ぬっておいおい」

「え、死んじゃうの？嫌だよ僕。赤いの出して死んじゃうの？」

「いや、血は出さないけど、干からびるって言うか・・・」

「干からびる？え、どんな状態？赤いのよりすごいやばい状態？」

「やばいのか・・・？いや、なんか・・・なんだろ。えぐい・・・？」

「えぐい？どんなのそれ。怖いのか？」

「まあ怖いかな・・・？」

「嫌だよ僕。早く村に着かないと干からびちゃうでしょ？早く行こ
うよ」

「俺たち迷子なんだから、そうしたくても出来ねーんだよ！」

二人の言い合いはまだまだ続く。そこへ誰かが通りかかる。

「・・・どうしたの？こんなところで言い合いなんかして・・・」

女の子の声だった。二人は声が出たほうを振り向き、ぼかんと口を
開ける。何でこんな草原のど真ん中で女の子と出会っただよ。女の
子は白い大きな布をかぶり、肌が見えないようにしている。てか、
本当に女の子なのかが不明だ。フラッドは女の子を指差して言う。

「え、何で、女の子・・・え、男の子？」

「女の子です」

女の子は答える。

「何で二人はここで言い合ってるの？中に入ればいいのに」

・中？“中”とは何か。中なんてどこにも……。女の子は少し考
えて一言言った。

「ついてきて！」

女の子はさっさと進んでしまう。クリアはフラッドを見る。そして
らフラッドもこちらを見てきた。そして同時にこう言った。

「行って見よう」

女の子に付いて行くと小さな穴の開いた場所を発見する。女の子は
そこに入っていく。二人はそこに入る。すると足が滑ったのかどん
どん下に滑っていつてしまう。

「うわあああああああ！！！！」

二人は声を上げる。だが、女の子も滑っていたが、全然怖そうじゃ
なく、普通に滑って言っていた。むしろ微笑んでいる。二人は一番
下まで滑っていった。女の子はきれいに着地したが、フラッドは前
にのめり込んでる様に着地し、クリアはその上に座ってる状態で着
地をする。クリアはすぐに退いたが、フラッドはのびている。

「大丈夫？いきなりだったもんね」

女の子は大きな白い布の隙間から、微笑んでくる。クリアはかわい
いなあと思った。そして女の子は大きな布を脱ぐ。その下は黄色い
ワンピースを着ている可愛い女の子だった。フラッドは起き上
がる。少年二人は周りを見渡す。普通の村みたいだが、日陰でうす

暗い。そして少女を見る。

少年一人と、何も知らない少女が出会った。

第三話 迷子（後書き）

また長くなった。

やっと三人が出会いましたね！始めるよー！

第四話 目的

「……………何？今の」

クリアが呆然としながら言う。フラッドは首を振る。そりや二人ともいきなり滑り落ちたんだ。そんなこと、お互い分からない。女の子は笑い、そして言う。

「ようこそ！ライト村へ」

と言った。確かにライト村に着いた。迷子になりながらも、ライト村に着いた。二人は顔を見合わせて叫ぶ。

「やった！！やっと着いた！！」

女の子は驚く。

「ここに、来たかったの？」

「ああ！本当、助かった」

女の子は笑う。そして自分の胸に手を当てて言う。

「私、ララって言うの。ここ、案内してあげようか？」

クリアとフラッドは顔を見合わせて

「よろしく」

「お願いね」

と言った。ララは二人に「ついて来て」と言い、先を歩く。二人は後ろを着いていく。フラッドはララの後姿を見つめる。クリアはそんなフラッドを疑問に思い、聞いてみる。

「どうしたの？フラッド」

フラッドはこちらを見ないまま、答える。

「しばらくここにいるぞ」

「そりゃ当たり前だよ。僕はここでもしかしたら何かを思い出せるかも知れないから、しばらくいなきゃ意味がないよ」

「・・・俺の目的もここにある」

「そうなんだあ」

クリアは少し考える。

「そっぴゃ、フラッドの旅の目的、聞いてないよ。何なの？」

「……………」

フラッドは答えず、クリアの前を歩く。クリアは首をかしげて歩く。ララはずっと何も話さず歩いてしたが、こちらを振り向き、笑顔で言う。

「ここが、村長さんの家だよ！挨拶しておこう」

「村長さん？」

クリアが聞き返す。ララはうなずく。

「そして、私の家でもあるんだ！」

二人は家を見上げる。言っでは悪いが、ボロい家。クリアは苦笑いをする。フラッドは深く、不気味に笑っていた。

第四話 目的（後書き）

フラッドは何考えてんだか、自分にもわかんねえ（（おいでも、こういう流れにするつもりはあったんで、安心して自分について来て下さい！

第五話 大人

「はじめまして。ようこそ、ライト村へ」

村長と言われた人が言う。この村の村長は比較的若かった。三十代後半の人みたいだ。クリアはフラッドに説明されて、村長はお年寄りだと想像していたためビックリした。

ララは笑って、手のひらを上にし、村長に向ける。

「私のパパ・・・じゃなくて、お父さんだよ！」

ララは急いで言い直す。クリアは微笑んで返事を返す。フラッドも返す。微笑んでくる村長に、フラッドは少しおびえる。クリアはフラッドを見つめ聞いた。

「どうかした？」

「・・・いや！何でもねえ」

フラッドはあわてた様子で笑った。

「フラッド、大人が嫌い？」

「・・・え？」

「あ、でもそれじゃ可笑的いか。町の店員さんとは普通に話してたもんね」

「・・・あ、大人が、苦手・・・なんだよ。うん。あの店員はまだ若かったろ？だから大丈夫だったんだ！」

フラッドはまるで何かを肯定してるように見えたが、クリアは気にならず、納得した。

「是非、ゆっくりして行ってね」

村長は優しく言うてくる。クリアは笑顔で答えた。

「はい、そうさせて頂きます」

クリア、フラッド、ララは家を出る。ララは二人に微笑んで言う。

「村を案内してあげようか？」

フラッドが答える。

「じゃあ、宿屋まで、案内してくれないか？しばらくこの村に居つもりだ」

「そうなの！？じゃあこっちだよ」

ララはともうれしそうだった。ララは小さな声で鼻歌を歌う。クリアはそれを聞いてニッコリ微笑んだ。

第五話 大人（後書き）

今回文章が短い・・・。

しかも投稿が遅かったし。すみません。

呼んでくれる人、すいませーん！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4841j/>

悪魔の創造った物語

2010年12月14日20時39分発行